



古典対照語い表

宮島達夫編

笠間索引叢刊 4

まえがき

本書は、古典のなかでどの単語が何回ずつ使われているかを、表にしてしめたものである。とりあげた作品は、

万葉集・竹取物語・伊勢物語・古今和歌集・土左日記・後撰和歌集
・かげろふ日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡
・方丈記・徒然草

の14である。

戦後、古典の総索引がたくさんつくられるようになったことは、たいへんよろこばしい。しかし、これらの索引のあいだにはどのようなことばを1単語とみとめるかという点で、かなり大きくいちがいがみられる(宮島「総索引への注文」『国語学』76)。ここでは、それらの点について、できるだけ一定の方針で統一するようにつとめた。それで、結果的には、ある索引にのっている項目でこの語い表にはのせてない、というばあいもある。たとえば、「心なし」という単語がこの語い表にないのは、これを「心」と「なし」とにわけてかぞえたためである。逆に、索引にはない見出し語をたてたばあいもある。こうして単位を修正したため、源氏物語を例にとると、つぎのように大きく数がかわっている。

	ことなり語数	「心」	「たまふ」
修正前	14,206	1,489	13,882
修正後	11,423	3,411	81

これは、「心」については「心なし」などの「心」をあわせため、「たまふ」については補助動詞としての用法をすてたためである。したがって、この表を〈索引の索引〉として利用するにしても、ほかの作品の用語と比較するにしても、「凡例」にのべた単位認定その他の方針に注意していただきたい。

この表をつくるまでには、何人ものかたにお世話になった。特に、原稿の清書をおねがいをした豊泉美奈子さん、調査を手つだってくださった力石麗子さんほかのかたがた、出版についてお世話いただいた国語研究所の岩淵悦太郎所長に、ふかく感謝したい。

なお、この調査に対しては、1967～69年度の科学研究費をうけた。

1971年8月5日

古典対照語い表

目 次

あ	1	ち	184	む	286
い	19	つ	188	め	289
う	35	て	196	も	290
え	50	と	198		
お	52			や	297
		な	208	ゆ	303
か	72	に	219	よ	307
き	92	ぬ	223		
く	101	ね	225	ら	313
け	109	の	227	り	314
こ	111			る	315
		は	230	れ	315
さ	126	ひ	240	ろ	315
し	139	ふ	252		
す	156	へ	260	わ	316
せ	162	ほ	262	み	321
そ	165			ゑ	323
		ま	266	を	324
た	170	み	276		

統 計 表

(1) 度数・使用率換算表	330
(2) 品詞別統計	334
(3) 語種別統計	336
(4) 上位20語の表	337
(5) 14作品に共通の137語	339
(6) 用語の類似度	340

第3版補記 [フロッピー版の紹介]	341
-------------------	-----

凡 例

(1) 資 料

調査にはつぎの総索引をつかった。

正宗敦夫 『万葉集総索引』

山田忠雄 『竹取物語総索引』

伴 久美 「伊勢物語に就きての研究 索引篇」(大津有一編『伊勢物語に就きての研究』所収)

西下経一・滝沢貞夫 『古今集総索引』

日本大学文理学部国文学研究室 『土左日記総索引』

大阪女子大学国文学研究室 『後撰和歌集総索引』

佐伯梅友・伊牟田経久 『かげろふ日記総索引』

榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美 『枕草子総索引』

池田亀鑑 『源氏物語大成 索引篇』

東京教育大学中古文学研究部会 『紫式部日記用語索引』

東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾 『更級日記総索引』

秋葉安太郎 「校本大鏡総索引」(『大鏡の研究 上巻 本文篇』所収)

青木伶子 『方丈記総索引』

時枝誠記 『徒然草総索引』

(2) 本 文

[1] 歌集については、歌の部分だけを対象とし、序・詞書・左注などはふくまない。^{注1)}

[11] 万葉では、「或本歌曰」「一云」などとあるものはとるが、「反云」などとある注記の部分(例, 983・3261・3839)はとらない。

[2] 本文は索引のよっているものをとる。伊勢・源氏で参考にあげている異本の部分はふくまない。方丈記は広本をとる。

[3] よみ・解釈は原則として索引のとおりとする。^{注2)}

[31] 索引が二つ以上の解釈をしめしているばあいは一つだけをとる。そ

の際の基準はつぎのとおり。

[311] 万葉については、まず「万葉集大成 本文篇」のよみにより、それできまらないものは「万葉集古義」のよみによる。それでもきまらないつぎの4カ所は、——の方を採用した。

(552) 二走 「ならびゆく」 「まどはしぬ」

(1982) 不定 「いさよひに」 「さだまらず」

(2842) 望 「ともしみ」 「のぞみし」

(3419) 奈可中次下 「なかなかしけに」 「よなかにふくに」

[312] 源氏の〔備考〕にしめされた解釈はとらない。

[313] 徒然については日本古典文学大系の解釈による。

[32] 索引が「未詳」「未勘」としているものは、そのとおりにする。それ以外の語について、万葉では「万葉集事典」にしたがったところがおおい。

[4] 漢字のよみも原則として索引のままとし、月名のよみの不統一などもそのままにした。ただし、以下の点については索引のよみを修正して統一をはかった。

[41] 月日について。

「～ぐわち」(枕) → 「～ぐわつ」

「よっか」(枕) → 「よか」

「むゆか」(土左・かげろふ・枕) → 「むいか」

「ここのか」(枕・大鏡・徒然) → 「ここぬか」

「とをかあまり～か」
「はつかあまり～か」 } の類(土左・更級) → { 「じふ～にち」
「にじふ～にち」

[42] 「尺」「別」は「しゃく」「べち」に統一。

[5] かけことばは一方の意味でだけとる。索引で意味の主従を区別しているときはそれにより、区別なしにあげられているばあいは、こちらで判断した。^{注3)}

(3) 範 囲

[1] 自立語だけを対象とする。

[11] 動詞(および動詞型活用の助動詞)の連用形に直接つづいて補助動詞的にもちいられた「きこゆ」「たまふ」「はべり」「まうす」「さふらふ」

「ます」「まつる」「たてまつる」「たばふ」「たばはる」「たぶ」は、助動詞なみとする。

[111] 「～てはべり」「～にさふらふ」「～くはべり」の類は動詞とする。

[112] 源氏の索引で「たまふ」「はべり」など自立・補助両用法を区別していないものについては、助動詞の部にあげられているものの数をひいたものを自立用法の数とした。

[12] 「な……そ」「なべに」は助詞, 「る, らる」「ごとし」は助動詞とする。

[13] 「なり」は、存在の意味の「にあり」が約されたものも助動詞とする。

[14] 「ものから」「ものの」「して」「やうなり」などは、自立語+付属語とする(それぞれ、名詞の「もの」「やう」、動詞の「す」に合併)。

[15] 「この」「かの」「わが」「たが」などは、この形で連体詞とし、「こは」「わを」などは「こ」「わ」とする。

[16] つぎにあげる接辞は助詞なみにあつかう。^{注4)}

お・おん・おほん (おまへ おんかた) み(み堂 びす みぶく
し みのり び井) ご(御相伝); ら(子ら) ども(子
ども) たち(神たち) ばら(とのばら); ごと(年ごと)
づつ(すこしづつ) 等(格式等); なす・のす(真玉なす);
み(山高み 負ひみ抱きみ)

[161] ただし、つぎにあげるような「お」「み」および1字の漢語についた「ご」は例外としてつける(くわしくは表を参照)。

おまし おんぞ; みかど みこ みやま みき; 御幸 御所

(4) 単位のながさ

[1] 動詞の連用形に動詞・形容詞がつづいた、いわゆる複合動詞・複合形容詞は、全体として1語とする。^{注5)}

(例) とびあがる ちりみだる かきにくし

[11] 両者のあいだに助詞や「たまふ」「たてまつる」がはいったものも、これらを無視して考える。

(例) 「ちりぞみだる」「ちりもみだれむ」「ちりなみだれそ」→
「ちりみだる」に合併。「見たまひなる」「見たてまつりなる」
→「見なる」

〔2〕名詞についての動詞・形容詞・形容動詞は、原則としてきりはなす。^{注6)}

(例) 心/ゆく 心/なし 心/よげ するべ/す たび/かさなる
しほ/たる 目/かる

〔21〕ただし、つぎのばあいは、例外としてつづける。

〔211〕名詞が被覆形のばあい。

(例) あまくだる ふなのる

〔212〕連濁をおこしたばあい。連濁をおこしたかどうか索引によってちがうときは、源氏の索引を基準にする。

(例) 夜ぶかし (古今・後撰は清, 伊勢・紫・源氏は濁)

言とふ (万葉は濁だが, 源氏が清なのできる)

〔213〕1字の漢語についての「す」。

(例) 愛す 学す 死す

(「す」が和語や2字以上の漢語についてのばあいはきる。「あさり/す」「つき/す」「たえ/す」「出家/す」「用意/す」)

〔214〕つぎにあげるもの。

ものす; ものさびし ものしづか (これに類する, 「もの」が接頭語的につかわれたもの)

かたはらいたし

〔22〕〈名詞+用言〉の全体に接頭語がついたばあいは、接頭語をも独立させる。

(例) なま/心/なし

〔3〕形容詞連用形に動詞がつづいたものは、きりはなす。

(例) おもく/す かるく/す よう/せずば

(例外) なくなる なくなす

〔4〕〈名詞+(が)+名詞〉の形は、原則としてきりはなす。

(例) くもの/い とりの/こ つかの/ま わたの/はら 玉
の/を 山の/は をの/へ 野の/みや ふじの/やま
平の/のふときの/あそん 兵衛の/佐 和泉の/守 遠の
/国 うめが/はな あをねが/みね 讃岐の/典侍が/日記

〔41〕ただし、つぎのばあいは、例外としてつづける。

〔411〕まえの名詞が被覆形のばあい。

(例) あまの白雲 ふなのへ

[412] 連濁をおこしたばあい。

(例) 日のぐれ

[413] つぎにあげるもの、およびそれに類する少数のばあい。

ありのまま いきのを うのはな えのき きたのかた
きたのまんどころ ことのを 末の松山 西の京 まさ
きのかづら もののぐ もののけ 世のなか ありがほ
し みがほし みがほる いはがね

[42] この形にさらにほかの単語がついたばあいには、それをもきりはなす。

(例) うしの／つの／もじ くもの／うへ／びと ひとの／おや
／だつ 平／ないしの／すけ

[43] <名詞十つ十名詞>はつける。

(例) 沖つ白玉 国つみ神

[5] 並列の<名詞十名詞>を1語とみるかどうかは原則として索引にしたがう。^{注7)}

[51] 年月日は、おのおのをきりはなす。

(例) 安元／三年／四月／廿八日
やよひ／ついたち やよひ／はつかあまり

[52] <名詞十数詞>はきりはなす。

(例) 心／ひとつ 人／ふたり
ただし、時刻のばあいはつづける。子ひとつ うしみつ ま
た、日ひとひ

[53] <数詞十名詞><数詞十数詞>はつづける。

(例) 二つ文字 二つ三つ いつかむいか

[54] <姓十名><肩書き十人名>はきりはなす。

(例) 曾禰／好忠 皇后／安子 (cf. 光明皇后)

[6] <活用語の連体形十名詞>は、原則としてきりはなす。

(例) あくる／日 あふ／せ いふ／かひ／なし なる／かみ
ゆく／すゑ； なぐ／矢 いゆ／しし； うき／世 なき
／人； きし／方
ただし、とぶ火 ゆくて ゆくへ ほしきまま

[61] 「おなじ」は連体形なみにあつかう。

(例) おなじ／こと おなじ／さま

[62] 「おほき」は接頭語とする。

(例) おほきみかど おほきおほいもうちぎみ

[7] その他、連語か1語かが問題になるようなものの例。

あな／かしこ あな／かま いぎ／たまへ ただ／泣きに／泣く
く(「泣き」は動詞) いや／高に(「高」は名詞)

(5) 単位のはば

[1] 原則として、同語別語の認定は金田一京助『辞海』にしたがう。^{注8)}

[2] 品詞や動詞の自他がちがうことだけでは、別語の条件にしない。たとえば、「あはれ」では、名詞・形容動詞・感動詞の用例を合併してかぞえてある。^{注9)}

[21] 品詞との関係で問題になるものは、つぎのようにあつかう。

[211] 「いはく」の類は動詞(「いふ」)に。

[212] 「起きもせず」「見にゆく」の類は動詞(「起く」「見る」)に。

ただし、「つきす」「たえす」などは名詞(「つき」「たえ」)に。

[213] 「夜をさむみ」の類は形容詞(「さむし」)に。

[214] 「はかなの」「あなかしこ」の類は形容詞(「はかなし」「かしこし」)に。

[22] 枕詞だという理由だけでは特別あつかいしない。

(例) 枕詞「こもりぬの」は名詞「こもりぬ」に、枕詞「芦がちる」は名詞「芦」と動詞「ちる」とに、それぞれ合併。

[3] つぎにあげるようなものは、意味や表記のちがいを無視して合併する。

[31] 動物名と方角・時刻名。

(例) うし ひつじ うま

[32] 植物名とかさねの色目。

(例) さくら やまぶき やなぎ

[33] 官位・職名と、それが人名のように使われたもの。

(例) 右大将 式部

[34] 同音の地名・人名。

(例) 阿波～安房 紀伊～城 隆親～拳周

[4] つぎにあげるような、意味のちがいに関係しないよみ方・発音のちがいは無視して合併する。

[41] 清濁。

(例) おほどる(源氏)～おぼとる(枕)

誦す(伊勢・源氏・紫)～誦ず(枕)

[42] 特殊かなづかいのよみ方。

(例) ぬもり(万葉)～のもり(古今・後撰)

[43] つまる音のあるなし。

(例) もとも(万葉・徒然)～もっとも(竹取)

[44] む～ん。

(例) ねむごろ(伊勢・更級・方丈)～ねんごろ(源氏・徒然)

おむやうじ(伊勢)～おんやうじ(枕・源氏など)

[45] um～mum, ub～mub。

(例) うま～むま うめ～むめ

うべ～むべ うばたまの～むばたまの

[46] かみ～かむ～かん。

(例) かみなづき(万葉・後撰・更級・徒然)～かむなづき(伊勢・古今)～かんなづき(源氏・紫)

[5] 活用形の音便は原形に合併し、活用語の代表形および無活用語における音便は別語とした。

(例) 書いて→書く

おもしろう→おもしろし

搔いなづ / 搔きなづ

きさい / きさき

斯う / 斯く

まいて / まして

注1) 全体で統一的な作品をなしていると考えれば、これらもふくめるべきだが、万葉のばあい、歌の部分とはかなり異質だとおもわれるのではぶき、古今・後撰もこれにならった。

注2) たとえば、万葉の「思ひうらがれにけり」(2465)、「こぎたむ小舟」(358)のように、すでにその訓のまちがいがあきらかなばあ人も、「思ひうらぶれにけり」「こぎみる小舟」という訓は採用しなかった。中途はんばに訂正するよりは、「総索引本万葉集」に徹した方が、性格がはっきりしていてよい、とおもったからである。このため、おなじような文句が二つ以上の作品にでてきたばあい、それぞれ別に解釈され、ちがった単語としてかぞえられている可能性がある。

注3) このため、やはり、おなじようなかけことばの主従が作品によって逆に

解釈されている可能性がある。

- 注4) これらを助詞なみにするなら、敬称の接尾語「～どの」も同類とすべきだったかもしれない。しかし、「～どの」がたてももの意味もっていることがあること、「～院」「～公」「～卿」などとのあいだに線をひきにくいこと、などの理由で、そうしなかった。
- 注5) 現在の総索引類も大体こうしているが、理論的にはむしろきるべきかもしれない。この語い表をもとにして、きるという方針で集計しなおすことはできるので、一応つづけておいた。具体的ないちいちの例について、複合動詞とみとめるか、臨時に2語のつづいたものとするかについては、不統一なところが残っているとおもわれる。
- 注6) ここでとった方針のうち、常識的にとられている単語認定の方針と、いちばん大きくいちがうかもしれないのは、この項目である。この点については、索引のあいだに、かなりの不一致がみられるにもかかわらず、はっきり処理の方針をかいたものは、ほとんどない。かげろふ・紫の索引で、「心」「もの」に形容詞・形容動詞がついたばあいをつける、とある程度である。一方には、たしかに複合語とおもわれる結合もあるが、名詞に助詞がつかずにつかわれることのおおい古代語では、連語と複合語との区別はあいまいで、一貫した方針をつくろうとすると、このように原則として(きれるだけ)きる、ということになってしまう。
- 注7) 万葉の「ちちはは」「さといへ」、方丈・徒然の「つかさくらゐ」のように、2語としてあったものを修正して1語としたものもいくつかあるが、この点でもやはり不統一が残っているだろう。
- 注8) 『辞海』をえらんだ理由は、基本語も古語ものっている中辞典であり、その同語別語の認定がわりに妥当だとおもわれたからである。結果的には、辞典や索引の類で別語としているものを合併したばあいがおおい。
- 注9) 「あはれ」に(形動)とあるような品詞の注記は、意味をあきらかにするための便宜上のものであり、したがって付表の品詞別統計表もおおよそのものである。

●編者紹介

宮島達夫 (みやじま たつお)

，茨城県水海道市に生まれる。

昭和28年3月，東京大学文学部卒業。国立国語研究所を経て，現在，大阪大学文学部教授。

主要著書：『動詞の意味・用法の記述的研究』『国研報告43』（秀英出版），『単語指導ノート』（麦書房）他

こてんたいしゅうご ひり
古典対照語い表

●笠間索引叢刊 4

昭和46年(1971)9月30日 初版第1刷発行

平成4年(1992)9月30日 三版第1刷発行

編者 宮島達夫

発行者 池田つや子

発行所 有限会社 笠間書院

東京都千代田区猿樂町2-2-5

興新ビル 〒101

電話 東京 03 (3295) 1331

ISBN4-305-20004-X C3381 小田製版印刷・渡辺製本
(本文用紙：中性紙使用)